

## 松菊里石棺墓出土の銅剣を考えるための 10 の覚え書き

大貫静夫

1. AMS 年代対考古学年代という図式で対処してはならない。AMS 年代に反対するかしないかで敵か味方かという視座はことの本質を見誤っている。考古学側にはすでに克服しておくべきだった負の遺産が多数未処理のまま残されていたことを気づかせたのが今回の AMS 年代であり、それまで再考の機会をもちえなかったのが不幸であった。それを「落とし穴」と称することもあるが、自らが落ちたことに気づかなかつた落とし穴はまださまざまところに仕掛けられていたのである。
2. これまでの紀元前一千年期の朝鮮半島だけでなく遼東ですら編年の枠組みは遼西を起点とする傾斜編年が主流であった。とくに、靳楓毅による青銅短剣の傾斜編年の影響は甚大であった。また、南山根発見以前の銅剣の旧年代観に基づく年代がさまざまな形で今に至るまで生き残ってしまっていた。是正する必要があるのはこのような相対年代の枠組みである。遼東では 60 年代の北朝鮮の提起した年代の見直し、我が国では朝鮮半島での岡内 1982a 編年や千葉基次 1992 による松菊里の位置づけが再評価されるべき。
3. 宮本 Vb 式には Va 式の分割再利用も含まれるという。入手困難でかつ需要があったということを物語っている。最近武末あるいは宮本自身もまた宮本 Vb 式に含められた比来洞が松菊里より古い可能性を指摘しているように、朝鮮半島南部の銅剣はすでに松菊里が最古ではない。Vb 式の一部が双房系の誠信村例にやや類似することに意味があるのではないか。
4. 上記のように松菊里銅剣は朝鮮半島南部最古ではない。宮本の全長最大幅比による遼東系の範囲にぎりぎり入るが、より大型である松菊里に形態的に対応する遼東の銅剣はやはり遼東最古ではない。したがって、遼寧式銅剣遼西起源説を採用した場合、松菊里は遼西の上限年代までさかのぼらない。遼東の最古段階である美松里型土器を伴う双房系の銅剣は双房自身では年代を決めがたいが、林滢やそれを追認した千葉基次が想定したように西周(~前 771)後期までさかのぼる可能性がある。遼西との間にタイムラグを考慮する必要はなさそう。松菊里併行段階はそれより一段新しくなる。下限は最近宮本も指摘しているごとく、春秋後期の鄭家窪子 M6512 や臥龍泉墓より古い。紀元前 5 世紀前半から中頃を下限とする。その間のどこかを相対的に定めるのが考古学者のこれからの仕事であろう。したがって、朝鮮半島最古段階の銅剣(松菊里ではない)期の遼西、遼東の上限は西周後期であり、松菊里段階の上限、下限はそれより遅れ、あえて言えば、前 8-6 世紀頃になろう。この年代観はかつての岡内、千葉、最近の宮本、石川日出志とも大差はない。傾斜編年という呪縛から逃れることができれば皆そうなるということである。それは 60 年代北朝鮮の遼東編年にさかのぼることになる。これ以上の時期限定では、そこまで古くする根拠はあるかという設問より、そこまで新しくする根拠はあるかという設問が設定されるべきである。
5. 松菊里銅剣が退化形であるから後出するという議論は近藤喬一以来あるが、これは傾斜編年を正当化するために用意された道具立てであった。遼東では儀器化したものが古いことは宮本もすでに指摘しているところであり、遼東系に連なる松菊里銅剣が儀器であったとしても、それだけでは傾斜編年の根拠にするのはあぶない。また、Va 式を上記した上限年代近くまで古くしようとすると、同段階とした IIa 式、皿 a 式はともにそこまで古くなりえないから、松菊里を先行させる岡内編年の枠組みに戻すことになる。そうでなくとも、宮本編年では IIb、c、IIIb、c 式が後に続くから、下限ぎりぎりの年代はとりにくい。
6. 岡内編年では、松菊里の年代が春秋中期を上限とした遼寧第 I 式と同時期かやや下がるという非傾斜

編年を採用しているのが重要なのであり、春秋中期末とした紀元前 6 世紀という年代だけを引用するのは問題である。その後、岡内自身が遼寧 I 期の南山根の年代を春秋前期まで上げているので連動してより古くなるのが岡内の論理の帰結のはず。

7. 朝鮮半島の青銅短剣の年代とは異なり、遼西や遼東では中原青銅器との対比から年代が決められているので信頼できるというのは問題である。遼西ですら、その歴史的背景からであるが、中原系青銅器はすべての墓に伴うわけでもなく、西周後期から春秋前期のあと春秋中期が空白に近くなる。再び交渉が盛んになる春秋後期段階以後の中原系青銅器でも年代観で個人差がやや大きいものがある。遼東に至っては中原系青銅器との交差で年代を決める方法はほとんどない。ただし、最近、山東半島で臥龍泉墓のものに近い、新しい形態の銅剣が春秋後期の墓から出ていることが指摘された。遼東の古式銅剣の年代の下限を考える際の定点としても重要であろう。
8. 靳楓毅が与えた遼東の銅剣の年代はほとんどの根拠が弱い。剣身、剣柄、土器の面から、戦国後期燕の東方進出の実態を過小評価することにもなりかねない楼上墓の明刀銭の伴出を否定し、林湮に従い劉家疇墓の短剣を一本分離し、遼東傾斜編年の根本を断ち切る。剣身の形態変化が年代決定に有効かどうかのリトマス試験紙のはず。それに連動した側面を持つ上馬石貝塚土器編年も大幅な修正が必要。
9. 細形銅剣の出現を明刀銭と関連づけ紀元前 300 年頃を上限としたことには考古学的な根拠はない。宮本も指摘しているが、ラッパ形銅器などを見れば鄭家窪子 M6512 につながってゆく。鄭家窪子より新しいとしても、あえてあまり間を空ける必要はなさそう。
10. 遼東での鉄器の出現は紀元前 300 年頃まで上がってよいが、それ以上上げる考古学的根拠はない。これは大陸研究者の共通した認識であろう。従来の年代観であっても、松菊里、先松菊里段階との対応関係が正しければ、それと同時代の九州に鉄器があるなどということは理解しがたかったはずである。曲り田の鉄斧を議論するより、動かぬ証拠である杭の加工痕から菜畑の段階から鉄器で加工されていたということの方がよほど問題である。すでにこの段階に希少品ではなく、日常用に鉄器が普及していたことになり、存否論を越えて、東アジア鉄器文化の理解にとっても大問題であったはず。提示資料がわずかで、比較参照した縄文の資料も明らかにしない一つの短い論文がそこまで説得力を持ちえてよいのであろうか。これまた弥生時代は鉄器時代という先入観が災いしていなかったか。いまだ第三者による検証研究のないことは残念である。

蛇足：東周の始まり、秦統一は年代は誰でも同じだが、殷の始まりと終わりは記録が不完全のため、春秋と戦国の境とその細別の前・中・後期は単なる時期区分だから年代は研究者によって異なる。できれば西暦、世紀で表記した方が誤解はない。しかし、歴史は 50 年刻みのようにうまく切れないし、西周以前は実年代がはっきりしないので、中国の時代区分を普通に使う。今回の議論では実年代が問題になっているのに、歴博年表に用いられている戦国の始まりの年代は特異であり、中国考古学の成果との対比の際は注意を要する。日本では、林巳奈夫の春秋、戦国の境界を前 450 年頃とした青銅器編年に依拠する研究者が多い。ただし「戦国青銅器」は様式で、漢代初期まで含んだ上での III 期区分であり、歴史上の戦国期の時間幅とは一致しない。遼東では、燕の東方進出を紀元前約 300 年頃と見なし、戦国時代後期の区分とおおよそ対応すると考えることが多いようだ。

\*2003.10 考古学研究会東京例会を中心に最近の研究会上で話したことをまとめ、最近の諸氏の発言にも若干触れた。文献や研究史については、東京例会発表要旨等を参照されたい。最近のものは本発表要旨集参照。